１２

翌日、由紀は靖の会社へ行った。社員は一人も来ていなかった。使う主の居ない机と椅子がもの寂しそうだった。広いオフィスではないがそれでも岡島社長が一人だけというのは由紀の目から見ても切なく思えた。

「早速来てくれて、ありがとう・・・」靖は少し緊張していた。“宇宙人の彼女”を見せるのは初めてになるから。

「何かまた堅苦しくなってるみたいね。別に取って食べるわけではないし、スクープ狙いで来てるのでもないし」と由紀は軽い口調で言った。

「そうなんだけど、いままで誰にも知られないでやってきたのを由紀さんとはいえ初お目見えするわけだし」

「岡島さんとすればそうになるものね。秘密を初めて知られる事になるのよねえ。確かに“人生の岐路”かもしれないわね」と今度はちょっと大袈裟に言ってみた。

「おーっと、プレッシャーが・・・」と靖はおどけた。

由紀は部屋の中を見回して“彼女”らしきがいないのが気になってきた。

「それはそうと、“宇宙人の彼女”が見当たらないけどどこにいるのかしら」

「うん、そうだね。直ぐ呼んでくるからお茶でも飲んで待っていてくれる」

と言うと隣接して借りてる部屋へ向かった。“彼女”から特別なメッセージは飛んでこなかったので拒否はしていないのだろうと思った。

　隣の部屋に入ると“彼女”はいつも通りの感じでソファーに座っていた。

「これからオフィスに行って会って欲しい人がいるのだけれど・・・」

と言うと“彼女”は分かっていたかのように何も言わず頷いて立ち上がった。

「事の成り行きで君を紹介する事になったので、協力して欲しいのだけれども」

“彼女”は二つ返事をするかのように二度コックリと頷いた。そして二人してオフィスへ向かった。

　ドアを開けて入って行くと由紀さんは少し緊張した感じで立ち上がった。靖が口を開いて紹介を始めた。由紀さんに向かって言った。

「こちらが僕の相方のいわゆる“宇宙人の彼女”だよ」

“彼女”はニッコリして無言ながら由紀に頭を下げた。

「こんにちは、初めまして。今井由紀と申します。宜しくね」と、ざっくばらんに言った。

由紀は続けて

「見た感じは普通の日本人に見えますね・・・。宇宙人って感じが良く分からないんですけれども」と第一印象を話した。

「そうかもね、喋らなければ分からないかもね。もっとも発声する言葉はピーとかビューンくらいだから言葉とも言えないけれども。どうやって宇宙人と説明したらいいのか困ったなあ」

「発音ではなくて直接、脳に意思が伝わるのは靖さんだけなの」

「どうかなあ・・・」

すると“そんな事はないわよ”と“彼女”から言葉が伝わってきた。

「あ、今私にも聞こえたわ。彼女の言葉が」とやや興奮して由紀は言った。

「これで、一応宇宙人と証明できたのかなあ」

「うーん、人間にも思念を送れる人がいるらしいし」

「じゃあ彼女に食事をしてもらおうか」と言うとプラスティックのトレイなどを彼女の前に出した。

彼女はそれを美味しそうに頬張ってあっという間に食べてしまった。

由紀もそこまで見せ付けられれば、人間じゃあないと思うほか無かった。

「そうね・・・。人間じゃあない生き物なんでしょうね。電波情報をキャッチできると言ってたと思うけれど、その辺はどうなのかしら」

「じゃあ、僕にメールを送ってくれる」と靖が由紀さんに言った。

由紀は言われた通りに靖に「宇宙、株式」と言うメールを送ってみた。

すると“彼女”が即座に“宇宙、株式”と靖がメールを確かめる前に“答えた”。

「凄い！・・・」と由紀は絶句してしまった。

靖は自分に届いたメールを確かめるまでもなく、由紀に同調の意味で頷いて見せた。

由紀は気を取り直して複雑な思いで新聞記者として自分に言い聞かせるように話し始めた。

「なるほど、宇宙人と言ってもいい存在かもしれないわね。これは大スクープなんだけど靖さんとの事だから秘密にするほかないのかしら・・・」

靖に問いかけた。

「そうしてもらえると、有難いんだよ」済まなそうに答えた。

「高く付くわよ・・・」と、由紀はおどけた。

「おいおい」と靖も応じた。

その時、“彼女”から思念が２人に送られて来た。

“私の存在を知ってるのはお２人だけなんですが、靖さんには席を外してもらって由紀さんとお話をしてみたいのですけれど”と。

そう言われた２人とも、どう言う事か全く見当がつかなかったが、成り行きに任せてみるほか無いと思った。

１３

靖は隣の部屋へ出て行き、由紀と“彼女”の２人がオフィスに残った。

由紀はやや不安を感じながらも記者魂を奮い立たせて臨もうと思った。

「あの、殆ど見ず知らずの私に何か重要なお話でもあるのでしょうか」

“彼女”はきりっとした目つきでコクリと頷いた。そして“話し”出した。

“正直に話しますと私は色んな方の体を借りてこの世界で存在して来ました”

由紀は体が強張るのを禁じえなかった。

“済みません、怖がらせてしまって。単刀直入に言います。これは取引です。私の「能力」みたいのは、お分かりいただけたと思います。この力を受け継いでもらえないでしょうか。自分の物にしたいと思えないでしょうか。急に言われても戸惑うだけでしょうが、それは当然ですよね。人間の形はしているけれども「宇宙人」になってしまう訳ですものね。実は最近、自分に野心みたいのが出てきまして、靖さんを援助するだけでは物足りなくて、もっと大きな事に挑戦してみたいと思い始めて来たのです。あなたならそれが出来そうな気がするのです”と、ここで思念が終わったようだった。

「・・・・・。何を考えていらっしゃるのでしょうか・・・」由紀は素直に言った。それともう一つ「この思念は靖さんにも届いているのでは」と。

“今伝えたことは、あなただけにしか届いていません。それと最初の質問ですが、それはまだ具体的には考えてはいません。由紀さんの立ち位置からどうにでも広がって行くものだと思います”

由紀はもう一つ気がかりな事を聞いてみた。

「靖さんとの事はどんな関係になって行くのでしょうか・・・」

“それはあなたの自由です。私は居なくなる訳ですから由紀さんが二人三脚で行くかそれとも、離れて独立して行くか。勿論そうなれば靖さんは普通の人に戻りますが”

「何か靖さんがあなたと出会った時に大混乱したのが分かる気がしてきました。いえそれ以上のトンでもない話に目が回りそうです・・・」

“回答は直ぐにでるものでは無いですよね。信じがたい申し出ですのでゆっくりとお考えになってください。でも当然ですが秘密は口外しないでください。それこそ世の中が大混乱に陥ってしまいかねませんから！”と、最後の語尾に力があったのを由紀は感じた。

そして大変な場面に直面してる自分に緊張していた。さらに一番の問題点を聞いた。

「私の体にあなたが入ってくると私の体は存在いていますが、私の心は無くなってしまうのじゃあないのでしょうか・・・」

“大丈夫です。基本的にはあなたの心が頭脳を支配して行きますから。能力だけが移植されるので、あなたの意思は継続されます”

「・・・考えてみます、と言おうとしてる自分の考えが怖いです・・・」

“ごゆっくり、考えてみて下さい。ただ私がもっと大きな事に挑戦してみたいと考えている事は記憶に残しておいてくれると嬉しいです”

「お考えは分かりました・・・。いえ本当の所は分からないですが、じっくりと自分を見つめてみようと思います。でも本心はこれが夢であって欲しいと思ってます」

由紀は途轍もない状況にめまいがしそうだった。